

第 6 回平成 2 9 年 3 月 2 7 日那須雪崩事故検証委員会 会議要旨

- ◎ 日 時 平成 2 9 年 8 月 3 1 日（木） 1 3 : 0 0 ~ 1 6 : 4 5
- ◎ 場 所 栃木県公館中会議室
- ◎ 出席者 委員 10 名 協力委員 4 名

1 開会

2 委員長あいさつ

《概要》

本日は、8 月 31 日であるが、最終報告の取りまとめまで、残り約一ヶ月である。今回も最終報告書の取りまとめに向けた非常に重要な会議であり、忌憚のない御意見を頂きながら、事故の再発防止のために有用な報告書を作成したいと思う。

3 議事

議事 1 : 会議等の公開・非公開の決定について【公開】

- ① 第 5 回検証委員会の会議要旨(資料 1)について公開することを確認。
- ② 議事 2「7 月 29 日に実施した聞き取り調査の結果概要について」は資料 2、議事ともに公開することを確認。
- ③ 議事 3「県高体連関係者からの意見聴取について」は、高体連会長、理事長、登山専門部長、副部長、専門部副委員長から再発防止策の検討状況等について公開で聴取することを確認。
- ③ 議事 4「最終報告に向けた検討について」は、会場を大会議室に移し、非公開で実施することを確認。
- ④ 議事 5「その他」について、資料 3、議事ともに公開することを確認。

議事 2 : 7 月 29 日に実施した聞き取り調査の結果概要について【公開】

平成 29 年 7 月 29 日に実施した聞き取り調査の結果概要について資料 2 により担当委員から説明。

《概要》

(大田原高校関係者)

事故当日の県教育委員会、県高体連本部、保護者との連絡体制、あるいは教職員間での役割分担について確認したほか、本件事故対応における課題、反省点を踏まえ、再発防止のために、どういったことに留意したらよいかということで意見を求めたところ、次のとおりであった。

- ・ 生徒の携帯番号は個人情報のため一覧にしていなかった。取扱いに注意した上で、事前に収集しておくべきであった。
- ・ 事故当日は全国から様々な電話が殺到し、また長時間にわたる通話で回線が塞がってしまい、必要な電話がつかない状況があったことから、例えば電話回線の一つは空けておいて、緊急時に専用に使えるものがあるとよい。

（講習会参加生徒）

事故の当日、講師から行動範囲に関して、最初にどのような説明・指示を受けていたか、樹林帯を抜けた後のルートの決定に当たり、班の中でどのような話があり、どこを目指すことにしたのか等について、聞き取りをしたところ次のとおりであった。

- ・ 講師からは、スキー場を通過して横の林に入り、行ける所まで行って戻るということで、具体的にどこまでという説明はなかった。
- ・ 樹林帯を抜けて上に出たときに、風が強くなってきたことから、生徒たちはその風を避けるために、岩を目指したいと講師に申し出た。
- ・ 目標とした岩について、それがどの岩であったかは明確にはなっていないが、目標とした岩の先に斜面が見えた。
- ・ 斜面を歩いていたときに、2時の方向から、横一直線にクラックが入り、斜面全体が流れたように崩れてきた。
- ・ 実際に雪崩に遭遇するまで、雪崩が起るとか、雪崩が起ったらどうなるなど、雪崩に関する危険性は、認識はしていなかった。

（講習会参加教員）

講習期間中、気象情報をどのように入手していたか、また、雪崩注意報についてどのように認識していたか、計画変更後の歩行訓練について、講師は行動範囲をどのように認識していたか、第1班が樹林帯を抜けて先まで進んだ理由や、雪崩の危険性についてどのように認識していたか等について、聞き取りをしたところ次のとおりであった。

- ・ 気象情報については、1日目の夜はテレビで確認していたものの、2日目以降はスマートフォンのバッテリーを保つために電源を切っていた等の理由で確認していなかった。
- ・ 雪崩注意報については、春先は低い可能性で広域に発表される日が多いため、現場で判断する必要があると考えていた。
- ・ 委員長、前委員長、主任講師の3名が計画変更の協議を行った際は、各人が認識する行動範囲に差異が見られたが、最終的に講師を集めた全体説

明の中では、行動範囲としてスキー場と樹林帯を指差しながら説明したため、講師間の共通認識は図られていたと考えていた。

- ・ 当初は、樹林帯の先くらいまでと考えていたが、生徒からの申し出に対し、強く止められず、斜面の角度や雪の状況から大丈夫だろうと判断して進んでしまった。
- ・ 滑落の危険性は心配していたが、雪崩の危険性については認識していなかった。

(雪崩について)

雪崩に関して、聞き取りの結果から新たな情報が得られたため、その結果を元に、防災科学技術研究所の調査結果を加味して解析した結果、本件雪崩が、当初想定していた発生地点より少し下の地点から、広い領域で発生したと思われる旨説明。

《質疑》

【委員】

雪崩の原因は、その場所に足を踏み入れたことにより発生した人為的なものか、あるいは、雪自体の重みで起こった自然発生なのか。

【説明者】

今ある情報だけでは、両方の可能性を完全に否定することはできない。

歩いていた隊列の近いところに亀裂が入ったという情報があり、人が歩いたことが雪に影響を与えたという可能性がある一方、雪自体がかなり不安定であったという調査報告もあり、自然に発生しても決しておかしくはない。

残念ながら、今の雪崩の科学でどちらかということは確定できない。

議事３：県高体連関係者からの意見聴取について【公開】

今後の最終報告のとりまとめへの参考にするため、県高体連会長、理事長、登山専門部長、登山専門部副委員長から、再発防止策の検討状況や今後県教委等に求める支援等について聴取。

《概要》

(県高体連会長)

県高体連では、今回の雪崩事故を我が事として捉え、スポーツを実施するということは、けがや事故と隣り合わせで、どの専門部にも起こり得る可能性があるということを再認識し、二度とこのような悲惨な事故を起こさないよう、再発防止に向けて、強い決意で臨むこととしており、再発防止に向けて検討していることについては以下のとおり。

- ・ 事業について、PDCAのサイクルをしっかりと行うとともに、報告書の提出を義務付けた。
- ・ 各専門部における「危機管理マニュアル」作成について、慣習的に行ってきた事業等に危険性が潜んでいるということを見逃しがちになることを踏まえ、各競技団体の協力も得ながら作成中。
- ・ マニュアル作成後は、危機管理に関する研修会を高体連事務局で実施するとともに、各専門部でも委員長を中心に会議等で周知し、徹底していく。
- ・ 危機管理マニュアルは、2部構成で作成することを考えており、前半（1部）の部分を、高体連に設置した危機管理マニュアル作成委員会で作成し、全専門部に共通する基本的な考え方や危機管理、安全対策等について記載する予定。後半（2部）は、各専門部が各競技の特性を踏まえて、作成。
- ・ 進捗状況について、前半（1部）は、おおよその骨子ができた状況で、後半（2部）については、全専門部から提出があり、修正を依頼しているところ。今年度中には完成させて、各専門部等へ配布予定。
- ・ 危機管理マニュアルの内容として、前半（1部）は競技運営や活動に当たっての留意事項として、一日の流れの確認や、危険と思われる活動内容や施設等の確認、緊急時の連絡体制等の確認、荒天、災害、食中毒、熱中症、感染症等への対応などを考えている。
- ・ 後半部分は、競技の特性を踏まえて、想定される事故と予防策に加え、過去に起きた事件事例や安全確認チェックリストも作成する予定。
- ・ 再発防止に向け、危機管理マニュアルの作成に当たり、どのような組織、機関に助言や支援を求めればよいか、今後、県教委と相談をしながら進めて行きたい。

（登山専門部長）

登山専門部の活動内容の見直しの状況等について説明

- ・ 4月5日、登山専門部専門委員が集まり、今後の対応を協議し、4月21日に第1回の専門委員会と専門部の総会を開き、当面の登山専門部の活動自粛を決定。
- ・ 5月26日には専門委員の一部が集まり、夏山にどう取り組むのかを協議した。その中で、緊急時の連絡体制や天候急変時の計画変更の際に、あらかじめ第2案をきちんと考えておくということや、顧問と部員の経験、力量を正確に把握しておく必要があるだろうということを申し合わせたうえで、県教委の登山審査会が再開されるのであれば、計画を出すということをお願いし、6月5日に、その旨通知したところ、夏山の解禁という形

で捉えられ、時期尚早ではないかという御意見をいただいた。

- ・ 6月22日に第2回の専門委員会を開き、5月26日に申し合わせた事項では不十分な点があったことから、詳細な夏山に向けての登山専門部としての留意事項一覧を作成、スポーツ振興課や高体連本部の指導を受けながら再度申し合わせを行い、6月30日に顧問会議を開催し、申し合わせ事項を伝達した。
- ・ また、7月9日には、顧問研修会を開催、安全登山についての知見を深めたところ。
- ・ 夏山登山計画審査会に提出した計画については、概ね審査を通ったことから、その審査結果を持ち寄って、7月23日に夏山連絡会と称して審査を通った計画を持ち寄り、指摘事項等を協議し、更に各顧問が登った山域であれば、危険箇所がどこにあるかなどの情報を共有して、夏山に向けての準備とした。
- ・ この会合の中で、スポーツ振興課から示されたチェックリストだけでは不十分な部分を見直し、事前チェックリスト、事後チェックリストを作成した。
- ・ 次に緊急時マニュアルの策定状況であるが、登山専門部としては、安全登山ハンドブックであるとか、あるいは他県のマニュアル等を参考にたたき台を作成し、専門委員それから専門委員のOBである顧問の意見を基に、専門部の案を作成、さらに県山岳連盟にチェックをいただき、追記を行い県高体連事務局へ提出したところ。
- ・ 再発防止に向け検討していることとして、今回多くの部がこの夏休みに山に登ったことから、夏山報告会を開催したいと思っている。
その中ではヒヤリハットの事例、つまり、けがには至らなかった、あるいは危ない思いはしたが、具体的な遭難などはなかったというものについて、事例を共有したい。
- ・ また、顧問研修会や各団体が主催している各種研修会へ顧問を派遣して顧問の力量を高めたいと考えている。その上で、顧問や部員の力量や研修会の出席状況等を正確に把握し、今後登山専門部主催の講習会などがある場合に、班編制を、今まで以上に注意を払ってしっかり行っていく必要があると考えている。
- ・ 大きな課題として、今後、春山安全登山講習会をどうするのかという点についても、検討していきたいと思っている。関東大会の予選時に、残雪がある山域に入ることがあり、雪渓を登る際の技術をどう習得すればよいか大きな課題。
- ・ さらに、今後の再発防止に向けて、山岳部顧問必携のような、安全対策を網羅したような、マニュアル、ガイドブックを、今後県教委の指導を受けながら作成したいと考えている。

- ・ 国や県教委に求める支援としては、顧問研修会を高校の教員対象に、開催してほしいとか、県外で研修が開かれる場合には、派遣していただきたいと思う。また、顧問必携を作るにあたり、30年近く前に、当時の文部省が発刊している「高みへのステップ」の改訂版を作成していただければと考えている。

《質疑》

【委員】

今回の講習会は高体連の主催であり、講習会について問題が起きた場合は、主体的に対応しなければならない立場と思うがどうか。

【高体連】

そのとおりである。

【委員】

今回のような講習会に参加する教員に対して旅費等を支出しているか。

【高体連】

各学校が出張旅費として支出している。

【委員】

今回の場合、引率教員に対し旅費以外に支給しているものはあるか、確認してほしい。

【委員】

今回の講習会は、各高等学校が正規のカリキュラムの一環として行う特別活動ではないということでしょうか。

【高体連】

部活動として行っているものである。

【委員】

学校教育法施行規則第83条及び第84条の規定に基づく高等学校の学習指導要領には、特別活動として学校行事がある。

その中に健康安全・体育的行事が定められているが、そこには、心身の健全な発達や健康の保持増進などについて理解を深め、安全な行動や規律ある集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資するような活動を行うこと、という記載があったと思う。

今回の講習会が各学校の部活動の一環として行われているとすると、今回の講習会は、高等学校の特別活動として行われたものではないという理解でよろしいか。

【高体連】

あくまでも部活動であり、学校教育の一環として行われているのは間違いな

いが、特別活動の枠組みではない。

【委員】

特別活動の中の学校行事は、ホームルーム活動や生徒会活動と同列に高等学校において正規のカリキュラムとして位置付けられているが、今回の講習会の場合は、各高等学校が行うものではなく、高体連が主催して、その内部組織である登山専門部が主管し、学校から教員や生徒が自主的に集まって行うということであり、高等学校の学習指導要領でいう特別活動の中の学校行事ではなくて、別枠の行事であるということによいか。

【高体連】

特別活動ではない。運動会などのように、学校で行うものではなく、部活動として行うものである。

【委員】

今回の講習会は、各高等学校が行う学校行事、先ほど言った学習指導要領にある学校行事ではないけれども、学校行事と同視し得るような教育活動の一環として位置付けられるものではないかと考えるがどうか。

【高体連】

学校教育の範疇の活動であることは間違いないが、特別活動ではない。

【委員長】

指導要領上では、学校の教育活動ではあるが、教育課程の中には含まないということで、課外指導と呼ばれている。教育活動としては非常に重要なものという位置づけである。

【委員】

なぜこういうことを伺ったかという点、例えば各高等学校独自の学習指導要領にある授業ないし特別活動ないし特別活動中における事故であれば、学校が安全配慮義務を負うという形で、起こった事故に対して責任を問われる場合があるという点は理解しやすい。しかし、活動がこれと同じではない、あるいは、同じではないがこれと同視し得る教育活動であると見る余地がある、ということになると、高体連と登山専門部がどういった安全配慮についての義務を負うのかという点が、最終的に問題になる。

今、高体連では、仕組みの見直しや再発防止のための対策を検討しているが、それは、高体連が組織として、安全に対する配慮を尽くさなければならないとの考えから、今回の事態を重く受け止めているからではないかと考えている。

【委員】

高体連では、各専門部の活動について、全体としてどういう報告を受け、管理をしていたのか。

【高体連】

安全対策については、会議等では周知はしていたと思うが、我が事として感じていなかったというところもあるかと思う。競技の特性上、各専門部のことについて、我々では分からないこともあり、全部の専門部の末端まで全てを把握するというのは、無理がある。本県に限ったことではないが、各専門部に安全対策や、大会運営、講習会の開催を任せて実施しているというのが実情である。

【委 員】

緊急時の連絡体制に不備があったとのことだが、今まで、災害が起こった時の緊急連絡体制というものは構築されていなかったのか。

【高体連】

これまでにはなかったが、今回、夏山登山計画審査会で、県教委から緊急時のフローチャート提出が義務付けられた。

【委 員】

大会などでは養護教諭や医療関係者を配置しているが、講習会の本部にそのような人を配置することは考えていないか。

【高体連】

大きな大会や危険な競技には配置を義務付けているが、講習会で配置している団体は少ないと思う。費用的な問題もあるが、生徒の安全という観点から今後検討していきたい。

議事４：最終報告に向けた検討について【非公開】

最終報告に向け、報告書の内容や今後の委員会の進め方、スケジュール等について協議した。

議事５：その他【公開】

委員長がスポーツ庁から提供を受けた通知等の資料の内容について説明した。

《概要》

冬山登山の事故防止に関する通知がどのような経過で、どのような内容で発出されているかということを確認した結果、昭和38年以前は高校生等に関する記載はなく、昭和39年に、なお書きで「なお、高校生の冬山登山はやめること。」と加えられている。それから、昭和40年度については「高等学校登山（山岳部）の活動は、夏山を中心に行うべきで、冬期積雪期における登山については、経験豊富なよき指導者のもとで高さを求めず、安全の確保ができる場

所で、基礎的技術の登山訓練にとどめるべきである。」という趣旨のことが書いてある。それから、41年度から51年度については、「高等学校生徒については、原則として冬山登山を行わず、また冬山登山を行う場合にも、学校及び保護者の了解のもとに、指導者その他の条件を整えた上で安全な場所での基礎的訓練の範囲にとどめよう。」と呼びかけのような形で書いてある。以降、昭和52年度から平成28年度まで、「高校生及び高等専門学校生（1年生から3年生まで）以下については、原則として冬山登山は行わないようご指導願います。」というような流れになっている。

昭和39年度から、なぜ、高校生の冬山登山の原則禁止という記述が出て来たのか、過去の主な高校等及び大学の山岳部等の遭難事故を調べたところ、その頃に、高校生が亡くなる事故が発生し、そのような記述が出て来たのかと推測している。その後も高校、高専の生徒の事故が多く続いているということで「冬山登山は、原則としてやめること。」という流れに続いていく。

参考までに、山岳遭難の概況ということで、発生件数、遭難者の推移をみると、急増しているという状況であり、登山への関心が非常に高まっている中で、残念ながら事故が多くなっている。登山の安全については、高校の登山部だけの問題ではなく、考えていかななくてはならない大きな問題である。

4 連絡事項

5 閉会